

修士論文(要旨)

2014年1月

ネガティブライフイベントを経験した大学生の
二次元レジリエンス要因とアサーションとの関連について

指導 幸田るみ子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
212J4004
伊庭 恵未

ネガティブライフイベントを経験した大学生の
二次元レジリエンス要因とアサーションとの関連について

目次

第1章、	問題と目的	1
第2章、	方法	1
第3章、	結果	1
第4章、	考察	2
第5章、	今後の課題	2
引用・参考文献			

1.問題と目的

悩みやストレスがある中で適応的に過ごしていくために注目されている概念のひとつにレジリエンスがある。日常的なストレスを抱えながらも適応的に生活していく上で重要な概念であると筆者は考える。またその日常的なストレスをネガティブライフイベントとし、ネガティブなライフイベントを経験した際、適応していくための心理特性、特に後天的に身につけることができる獲得的レジリエンスを明らかにすることには意義があると考えられる。また、レジリエンスとアサーションの関連性について検討することにより、獲得的レジリエンスを高めるための、臨床心理学的介入につながる可能性も考えられる。よって、本研究では、特に青年期という発達段階にある大学生に焦点を当て、日常的なネガティブライフイベントを経験した大学生の二次元レジリエンス要因とアサーションの関連について検討することを目的とする。

2.方法

首都圏の私立大学に在学する大学生 508 名を対象に質問紙調査を行った。有効回答は、311 名(有効回答率:61.2%)であった。質問紙の構成は、①ライフイベント尺度(平尾・山本,2008)、②二次元レジリエンス要因尺度(平野,2010)、③青年用アサーション尺度(玉瀬・越智・才能・石川,2001)である。

3.結果

まず、それぞれ 3 つの尺度に対して、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、ライフイベント尺度は元の 1 因子構造とは異なり、「日常の多忙さ」($\alpha=.83$)、「特別な出来事」($\alpha=.74$)の 2 因子が抽出された。二次元レジリエンス要因尺度は元の 7 因子構造とは異なり、「社交性」($\alpha=.85$)、「自他の理解」($\alpha=.70$)、「忍耐力」($\alpha=.71$)、「楽観性」($\alpha=.67$)の 4 因子が抽出された。また、青年用アサーション尺度は、いくつかの項目が削除されたが元の尺度と同じ「関係形成」($\alpha=.74$)、「説得交渉」($\alpha=.46$)の 2 因子構造となった。

本研究での新しい知見として、ライフイベント尺度の「日常の多忙さ」因子($t=2.14,df=309,p<.05$)、「特別な出来事」因子($t=2.78,df=309,p<.01$)、ライフイベント合計($t=2.99,df=309,p<.01$)について、男女間で差があり、男性の方が女性よりも、ネガティブライフイベントをネガティブなものとして捉えにくいことが明らかになった。また、学年差を見ると、二次元レジリエンス要因尺度の「社交性」因子($F(3,307)=4.338,p<.01$)は、1 年生の得点が有意に高く、レジリエンス合計($F(3,307)=4.582,p<.01$)は 4 年生の得点が有意に高かった。そして、青年用アサーション尺度の「説得交渉」($t=2.35,df=309,p<.05$)についても男女差がみられ、男性の方が女性よりも得点が有意に高かった。

レジリエンスとアサーションの関連については、二次元レジリエンス要因尺度のすべての因子と青年用アサーション尺度の「関係形成」との間に有意な正の相関がみられた(社交性因子 $r=.31,p<.001$ 、自他の理解因子 $r=.38,p<.001$ 、忍耐力因子 $r=.22,p<.001$ 、楽観性因子 $r=.31,p<.001$ 、レジリエンス合計 $r=.45,p<.001$)。よって、本研究の仮説の一部が支持される形となった。しかし、仮説との違いとして、「説得交渉」との関連はみられなかったこと、獲得的レジリエンス要因だけでなく、資質的レジリエンス要因もアサーションとの関連がみられたことが挙げられる。

また、ネガティブライフイベントを従属変数とした重回帰分析の結果、モデルの適合度

が低いということを考慮しなければならないが、ネガティブライフイベントの捉え方を説明する要因として二次元レジリエンス要因尺度の「社交性」因子($t=3.90, p<.001$)と性別($t=-2.84, p<.01$)が挙げられる可能性があることも示唆された。

4.考察

それぞれの尺度の因子分析の結果について考察する。まずライフイベント尺度の因子構造が変わったことについては、今回選んだライフイベント尺度の項目内容には、ライフイベントを大きく二つに定義した場合の、衝撃的で単発に起こった特別な出来事と日常的な適応努力という両者の意味合いが含まれていたためであると考えられる。よって、ライフイベントを測る際の尺度の選定を再検討すること、もしくは、新たな尺度の開発をしていくことが望ましい。次に二次元レジリエンス要因尺度については平野(2010)で、 α 係数が低い結果となっていた因子があったが、その部分について細かく検討がされていなかったことが考えられる。よって、尺度の選定を再検討するべきであるといえる。また、青年用アサーション尺度については、「説得交渉」の α 係数が低い結果となった。これについては、まず、対象者の人数の少なさや実施校が1校に限定されていたことが挙げられる。さらに、青年用アサーション尺度が10年以上前に作成されているため、現代の青年のアサーションについて捉えきれていなかった可能性があることなどが挙げられる。

レジリエンスとアサーションの関連については、レジリエンスを高めていくために、アサーションの中でも特に人と望ましい関係を形成していくという側面が重要になってくることが考えられる。重回帰分析の結果からは、ネガティブライフイベントを経験したとしても、その中で適応的に生活を送るためには、レジリエンスの中でも、人との関係性において積極的な働きかけをしていくという側面が重要になる可能性があることが示唆された。

5.今後の課題

今後は、調査対象者数や調査の実施校を増やし調査を行うことが望ましい。また、それぞれの尺度の再検討、重回帰分析のモデルの適合度を高めること、それぞれの概念の因果関係についての分析などを行っていかうと考えている。そして、レジリエンスを高めていくための具体的な臨床心理学的介入として、アサーション・トレーニングの中でも「説得交渉」という側面よりも「関係形成」について重要視したプログラムを開発・発展していくことが望まれる。

引用・参考文献

- 平野真理(2010)：レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み-二次元レジリエンス要因尺度(BRS)の作成 パーソナリティ研究, 19(2), 94-106.
- 平尾渉・山本眞利子(2008)：大学生におけるライフイベントに対する認知の違いと精神的健康・性格特性に関する研究 久留米大学心理学研究, 7, 95-102.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代(2001)：青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要 人文・社会科学, 50(1),221-232.